

はるかに

「ありがとう」を花せるお葬式
東京 千葉 埼玉 神奈川

孝行舎 株式会社 孝行舎

—お見積り無料 ご相談随時受付—

本社：東京都足立区中央本町 4-17-2
葬儀サロン：東京都足立区中央本町 1-19-2
赤坂営業所：東京都港区赤坂2-14-5 Daiwa赤坂ビル7階

0120-81-5548

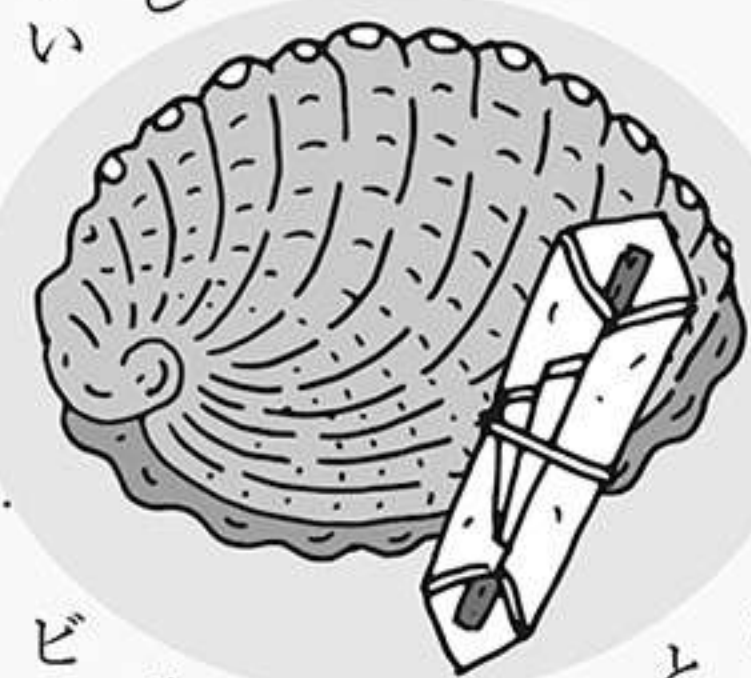
孝行舎 検索

深夜・早朝でもご遠慮なくお電話下さい
24時間・365日寝台車がお迎えにまいります

- すこやか「食」の旅——アワビ
- ご存じですか？——「ダーウィン」
- 伝統のモノ——じゃんけん
- 花ものがたり——ツツジ
- 生活の中の仏教語——冗談
- 仏事と葬儀の知識——弔辞を読むとき

すこやか 「食」の旅

アワビ



アワビは、海藻類が生育している岩礁地帯のごく一部の荒磯にか生息せず、どこの海にもいるというものはありません。日本ではそんなアワビを食用として珍重するだけでなく、祝い事などのシンボルとしても用いてきました。

◆伝説にみるアワビ

日本にはアワビを御神体とする神社もあり、アワビに助力を得たという伝説も語り継がれています。例えば、兵庫県朝来市にある赤淵神社には、次のような話が伝えられています。

飛鳥時代のこと。異国から賊軍が襲来して海上で合戦になった際、にわか強風が吹いて船はことごとく沈没。しかし、総帥である表米の宮の船だけは事なきを得て帰り着くことができた。そこで船底を調べてみると、破損を防いだ数多のアワビが付着し、そのアワビの一つには弥陀三尊が顕われ出ており、これぞ神仏のご加護と歓喜した表米の宮は「これ以降、わが子孫たる者はアワビを食らうべからず」との命を出したとのこと。

◆「熨斗(のし)」の正体

祝儀の贈答品などには必ず熨斗を添える習慣

があります。現在では紙で代用したり、「のし」と文字で書いたりしますが、「熨斗」を辞書で引くと「熨斗鮑の略」とあるように、熨斗は本来、アワビの肉をかんぴょうのように薄く長く削いだものを乾燥させて伸ばした「のしアワビ」のことを指します。(※現在、「のし」のひらがな2文字を続けて書くのも、のしアワビの形状を意識したものだといわれます。)

ところで、祝いの品にどうしてアワビが添えられたのでしょうか。一説に、古来、不祝儀には肉や魚など生臭いものは食べないという習慣があることから、ならば逆に吉事の際にはというところで、ナマガサの代表格としてアワビを用いるようになったということです。

因みに戦国時代には、戦の前に縁起をかつぎ、のしアワビ(打ちアワビともいいます)と勝ち栗(乾燥させた栗)、昆布を口に当てる「打って、勝って、よろこぶ」と、三々九度の杯を重ねたといわれています。

◆貝類の王者アワビ

アワビが古代から食用とされてきたことは、各地の貝塚からの出土でもわかるとされています。また「延喜式」(行政の規則や宮中の儀式などをまとめた平安時代の基本法典)には、税として諸国から納められたアワビについて、「長鰩」「蒸鰩」「佐渡鰩」(※「延喜式」では「鮑」ではなく「鰩」を使用)などなど、形状や加工法、産地などによって40種ほどにも細別された記載があり、当時においても、アワビがいかに美味で珍重された食材であったかがうかがえます。

ご存じですか？

ダーウィン

私たちは、歴史上の人物など一般によく知られている人について「きつこういう人だったのだ」などと、思い込んでしまっている場合があります。しかし、ときには「こんな意外な面もあったのか」と驚いたり、「私たちとあまり変わらないじゃないか」と、その暮らしぶりに親しみを覚えたりすることもあります。

* *

今回は、進化論で知られるダーウィンについてご紹介しましょう。

■怒りのあらし

「すべての生きものは、生存のために時間をかけて変化（*いままではこの変化は一般に「進化」と呼ばれていますが）、環境に適応してきた」これが、ダーウィンが著した『種の起源』の中心となる考えです。

しかし、この『種の起源』が出版された1859年当時は、西欧のキリスト教諸国が力を持ち、ほとんどのキリスト教徒は「この世界の動物や植物などあらゆる生きものは、天地創造のときに神が創り出したものだ」と信じていました。つまり、神が世界そのものを創ってから6日の内に、すべての生きものを、いまある形に創ったのだというのです。

ダーウィンの『種の起源』は、このように信じる人びとを打ちのめし、矢のような抗議と、怒りのあらしを巻き起こしたといえます。

しかしながら、多くの科学者たちはダーウィンの進化論の正しさを認め、世論も次第にそれを受け入れるようになっていきます。

■「悪童」だったダーウィン

ダーウィンは、1809年2月12

日、イギリス中部のシュルーズベリーに生まれ、チャールズ・ロバート（ダーウィン）と名づけられます。両親にとつては5番目の子どもで次男でした。父ロバートは、医者として人びとからも尊敬と信頼を集める人物、また母スザンナは陶器製造業で世界的に有名なウェッジウッド家の出で、ダーウィンは経済的にもとても恵まれた環境で育ちます。

幼い頃のダーウィンはあまり利発な子どもとはいえず、自身も「いろいろな意味で悪童だったようだ」と回想しており、大好きな父親をがっかりさせることも多かったといえます。そんなダーウィンですが、8歳の頃には植物に興味をもってその名前を知ろうとし、また、収集欲が強く貝や鉱石などありとあらゆるものを集めるなど、この頃からすでに「博物学者」としての片鱗を示していたようです。

■医者か？ 牧師か？

学校での授業にはあまり興味を持ってず、なかなか進路の決まらないダーウィンに、医学の道を進めたのは医者である父ロバートでした。そこで、エジンバラ大学でその勉強を始めますが、ダーウィンの興味の対象となったのは、本業の医学ではなく、近くの海

に生息する生きものたちで、大学の博物学会に入って科学論文を発表したりもします。

これでは医学の道は無理だと、今度は牧師の道を進められたダーウィンは、ケンブリッジ大学に入学し直し、一応牧師の資格をとります。しかし、植物学者のジョン・ヘンズロウなど、この大学での教授たちとの出会いが、ダーウィンを進化論への道に導くきっかけとなるのです。

■ビーグル号での航海

1831年12月、22歳のダーウィンは、ヘンズロウなどの推薦で、イギリス海軍の調査船「ビーグル号」に無給の博物学者として乗り込み、大西洋、インド洋、太平洋を巡りながら、土地、土地の珍しい動植物や地質を観察し、記録する旅に出ます。

「ビーグル号での航海は、私の一生を決定してしまった」とダーウィンも述べているように、5年近くにも及ぶ航海を終えて帰国したダーウィンは、自分の一生の仕事は、子ども時代から興味のあった博物学の研究を続けることだと、27歳にして進路を決めます。そして、それから20余年を経て、『種の起源』を通して自分の理論を世に問うたのです。

伝 統 の モ ノ

じゃんけん

道具いらずの 即時決定 「マシン」



「じゃあ、じゃんけんで決めよう」遊びとしてだけではなく、いまもさまざまな場面、じゃんけんの「出番」はあるようです。

じゃんけんの力

「ぼくが先だ、いや私が先だ」と何かの順番を争っていた子どもたちも、じゃんけんで決まったことには従順に従います。また「お先にどうぞ、いえあなたからどうぞ」と譲り合って埒の明かない大人たちも、遊び心を発揮して、ではじゃんけんで決めましょうとなると、案外スムーズに事が運ぶこともあります。

このように、じゃんけんには後腐りなく事を収める力もあります。その理由としては、互いに何の優劣もなく、平等な状況で即座に勝ち負けが決まるので、そのことに不満を抱く余地がないことが挙げられるかもしれません。

じゃんけんのルール

2人以上の人が片手で石(グー)・鉄(チョキ)・紙(パー)の形をつくり、どの形を出したかで勝敗を決める日本のじゃんけんは、どのような経緯を

て現在の形になったのでしょうか。

指を使って勝負をする遊び(拳遊び)は古くからあり、日本での起源は平安時代まで遡るともいわれますが、その伝来や変遷については、さまざまな説があるようです。

なかでも、三すくみ(蛙は蛇を、蛇は蛞蝓を、蛞蝓は蛙を、それぞれ恐れてすくむこと)の関係を指で表して勝ち負けを決める遊び、つまり、蛙(親指を立てる)は蛞蝓(小指を立てる)に勝ち、蛞蝓(小指を立てる)は蛇(人差し指を立てる)に勝ち、蛇(人差し指を立てる)は蛙(親指を立てる)に勝つという「三すくみ拳」は「虫拳」と呼ばれ、おそらくこれが、日本流に考案された日本で最も古い拳遊びで、現在のじゃんけんの基になるものだといわれています。

「じゃんけん」の語源

ところで「じゃんけん」という発音は、日本語としてはすこし異質な感じがします。この不思議な言葉の語源について、複数の説があるそうです。

例えば、「じゃんけん」は「いしけん(石拳)」ともいわれ、昔はこれを(じゃくけん)と発音したことから、それが訛って「じゃんけん」となったという説。あるいは、じゃんけんは2人で遊

ぶことから「両拳(りゃんけん)」「(両)は中国語では「リヤン」と発音します」と呼ばれ、それが「じゃんけん」に転訛したという説などさまざまです。因みに、天保9年(1838年)に刊行された川柳の句集『誹風柳多留』には「リヤン拳 鉄を出すは花屋の子」といった句もみられ、その当時「じゃんけん」は「りゃんけん」と呼ばれていたとも想像できそうです。

世界に愛される「じゃんけん」

明治以降の日本の世界進出や、現在の日本のアニメやマンガ人気、あるいは日本への外国人旅行者などにより、いまや日本の「じゃんけん」は世界に広まり、カナダには「世界じゃんけん協会」も設立されています。

因みに、愛好家によるじゃんけんの一般的呼称は、Rock(石)・Paper(紙)・Scissors(鉄)を意味する「RPS」というのだそうです。

フランスのように手で表す形が4種類あるなど、国によって多少の違いはあるものの、イランのように、手の形も同じ「グー・チョキ・パー」で、その意味も「石・鉄・紙」と日本と全く同じ国もあり、コミュニケーション手段としても、「じゃんけん」はこれからも役に立ってくれるかもしれません。

「ツツジ」

「ツツジ」の語源には、筒咲き、状の花の形に由来するという説や、早春から初夏まで次々と咲くという意の、続き咲き、からという説など、さまざまあるようです。



日本は「ツツジ」の種類が大変豊富で、北海道から沖縄までそれぞれ固有種があります。それら自生種を庭園に移植し、自然交配などで多くの変種が生まれました。そして「ツツジ」の栽培が流行した江戸時代には、数多くの園芸品種が作り出されたといえます。

因みに、元禄ツツジとも称された江戸時代のツツジ流行の最中、元禄5年（1692年）に版行された『錦繡枕（きんしゅうまくら）』（ツツジとサツキの品種や栽培法を解説した世界初の専門書）には、164種のツツジ類が取り上げられているそうです。

ところで、「ツツジ」は漢字では「躑躅」と書きます。一説に、この漢字は（足踏み）の意で、羊がツツジを食べて足踏み（躑躅）をして死んだことに由来するとされ、ツツジの本来の漢名は「羊躑躅」だともいわれます。

*花言葉……「節度」「慎み」など。

冗談

普段、「冗談」という言葉はさまざまな場面で使われています。例えば「冗談もほどほどにしてください！」と抗議したり、「あの人はどうも真面目過ぎて、冗談をすぐ真に受けてしまうんだから」と困惑したり…。このような場合の「冗談」は、「ふざけて言う言葉」や「戯れに言う話」などを意味します。また、「冗談に皮肉を言ったら、本気で怒りだして困ったよ」などと言う場合の「冗談」は、「戯れ」や「いたずら」そのものを指します。

仏教において「冗談」は、修行中に交わされる仏道と関係のない無用な対話、つまり無駄話のことをいいます。だからだとして、くだらなく長いことを表す言葉に「冗長」がありますが、この「冗」も無駄の意で、仏教でいう「冗談」の「冗」と同じ意で使われています。

しかし、俗世間で飛び交う「冗談」は、あなたが無駄とばかりは言えないかもしれません。なぜなら、冗談を言うことで場を和ませたり、気持ちの落ち込んだ人を励ましたり、プラスの作用が働くこともあるからです。



弔辞を読むとき

弔辞は、葬儀の席で故人を悼んで捧げる言葉です。すから、弔辞を読むのは、故人と生前親交の深かった友人や職場の同僚などに依頼するのが一般的です。また、弔辞を頼まれた場合は、なるべく断らずに受けるのが礼儀です。

薄墨で奉書紙などに清書するのが弔辞の正式な作法ですが、近年では、心がこもっていれば、慣れない形式にこだわる必要はないという考え方から、便箋にペンで書いたり、パソコンで打ち出すこともあるようです。

弔辞は3分ほどにまとめるのが適切だといわれます。その文面は、あまり形式ばらずに故人の手柄を偲ぶ内容が相応しく、また、遺族への思いやりの言葉も忘れないでおきたいものです。因みに、以前は重ね言葉など、不幸が続くことを連想させるような「忌み言葉」は避けるべきだといわれましたが、いまではそれはあまり気にせずに、故人への思いをこめた自分らしい言葉を用いるのがよい、という考え方に変わってきているようです。

なお、読み終えた弔辞は、上包みや封筒に戻し、正面を霊前に向けてるように祭壇に置きます。

（※弔辞に関する点がらについては、個々の葬儀により異なる場合があります）

